資料　１－１

令和２年度 主郭地区第１３次発掘調査成果

【　小牧山城（国史跡小牧山）とは　】

小牧山城（愛知県小牧市堀の内一丁目地内所在・写真１）は、濃尾平野の北東部に独立して所在する標高８５．９m、面積約２１haの小山です。天正１２年（1584）、小牧・長久手の戦いで、織田信雄・徳川家康連合軍の本陣となったことで知られていますが、永禄６年（1563）に織田信長が初めて自らの手で築き、岐阜に移るまで４年間居城とした城でもあります。史跡整備に伴う近年の発掘調査により、近世城郭のルーツ、信長が築いた小牧山城の姿が明らかになりつつあります。

写真１
小牧山城（史跡小牧山）全景

【　調査の概要　】

令和２年８月から令和３年３月にかけて、主郭西側下の曲輪斜面と主郭東側において、約２５０㎡を対象として調査を実施しました（図１）。

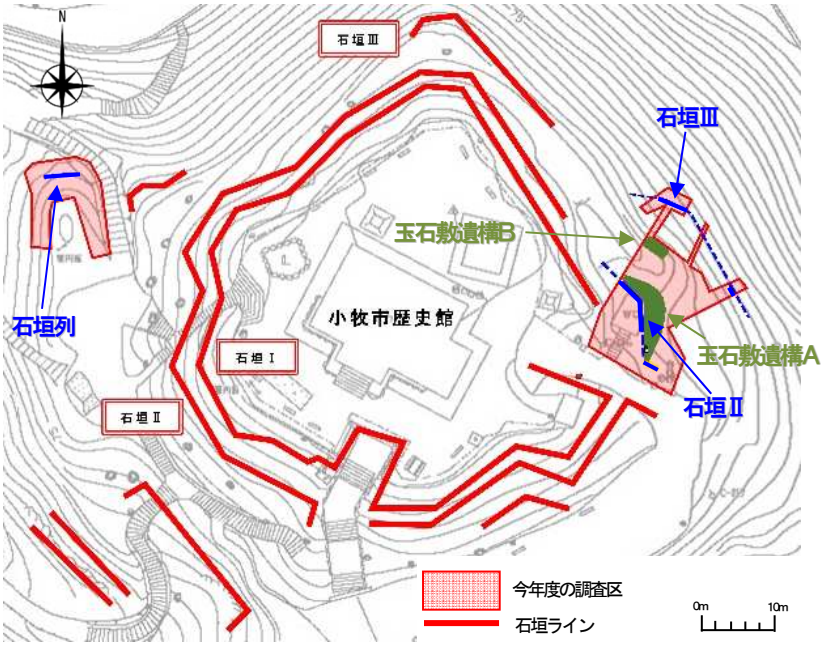

図１　小牧山城主郭部石垣と今年度の調査区

【　成果その１　】

主郭東側で、２段目と３段目の石垣（石垣Ⅱ・Ⅲ）のプランが明らかになりました。

主郭東側では、石垣Ⅱと石垣Ⅲを検出しました（写真２・３）。石垣Ⅱは、調査区北西から南東にかけて４．５mほどで屈曲し、南へ４．７m続きます。その先にも裏込石が残ることから、石垣があったと推定され、その長さは２．８m程です。さらに石垣Ⅱはその先で入隅を形成し南東へ屈折します。石垣Ⅱを構成する石材は、長辺４０～６０㎝の自然石で、石垣の隙間を詰める間詰石も残存します。残存する裏込石の高さなどから推定される石垣Ⅱの高さは約１．２mです。

また、石垣Ⅱでは背面の岩盤を水平・垂直に加工（地業）しています。

調査区内の石垣Ⅲの推定延長は約１８．５mで、推定高が１mの腰巻石垣（土塁の下部のみに石垣を築いたもの）です。構成する石材は長辺３５～５５㎝程の大きさで、１０㎝程度の間詰石も残存します。

石垣Ⅲはこれまで主郭北斜面と南東斜面で確認されていましたが、今回の調査で石垣Ⅲが主郭の北～東～南にかけて巡ることが判明しました。

写真２　石垣Ⅱ・玉石敷遺構Ａ

写真３　石垣Ⅲ

【　成果その２　】

石垣Ⅱの前面の平坦面で、玉石敷遺構を２箇所確認しました。

主郭周辺曲輪に玉石を敷くことにより、中世以来の城にはない、新しい空間・機能を城に備えようとした信長の城づくりの源流が小牧山城にあることが明らかになりました。

石垣Ⅱに沿う玉石敷遺構Ａ（写真２）の幅は２～３m程で、直径５～１５㎝程の玉石がやや凸凹に敷かれます。玉石敷遺構Ａの北側で玉石敷遺構Ｂ（写真４）を確認し、この玉石も直径５～１５㎝程の大きさで、範囲は東西約４m、南北約２mの長方形と考えられます。玉石敷遺構Ａと比べ、扁平な玉石が密に敷かれます。玉石は小牧山内で採取できないため、ある一定の規格に沿って選別し、外部から持ち込んだものです。

山頂の空間に、最大約３mの幅という広い面積で玉石を敷く玉石敷遺構Ａは、その敷設範囲内に立石（写真５）と考えられる意図的な石の据え置きがあることなどから、いわゆる「枯山水」のような庭園に伴う石敷遺構の可能性が推定されます。後の信長の居城である岐阜城では、城内に複数の庭が造られていたことが、近年の調査で明らかになっています。

戦国時代の連歌師・里村紹巴が、永禄１０年（１５６７）に富士見物のため、京都と駿河を往還した紀行文である『富士見道記』において、小牧山城の新しい庭の完成を祝う連歌の会の発句をつとめたと記述があります。この史料が示す「庭」が今回の地点とは断定できませんが、小牧山城内に庭が存在していたことが推定できます。中世以来、戦う施設として造られた城ですが、後の城郭の中には「山里曲輪」という数寄屋（茶席・勝手・水屋などが備わった別棟の茶室）や、庭を設ける遊興・風流な空間を備える城が存在します（豊臣大坂城、肥前名護屋城など）。

今回確認された玉石敷の空間は、小牧山城に始まる信長の城づくりが後の城づくりに影響を与えたことを物語るもので、大変貴重な遺構です。

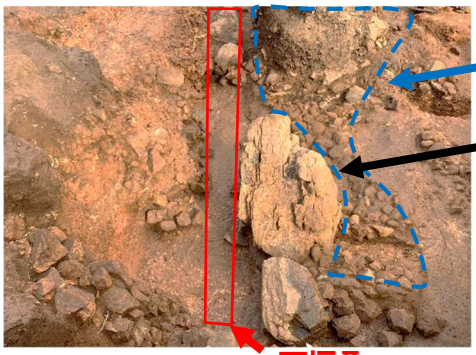

写真５
立石と考えられる巨石

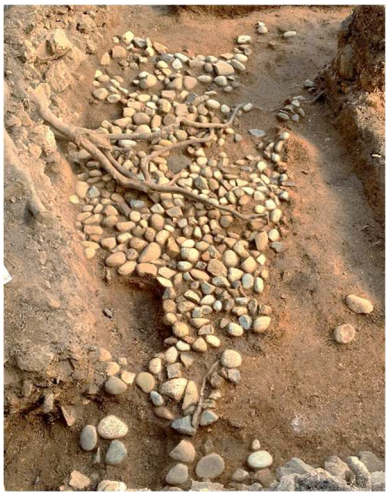

写真４　玉石敷遺構Ｂ

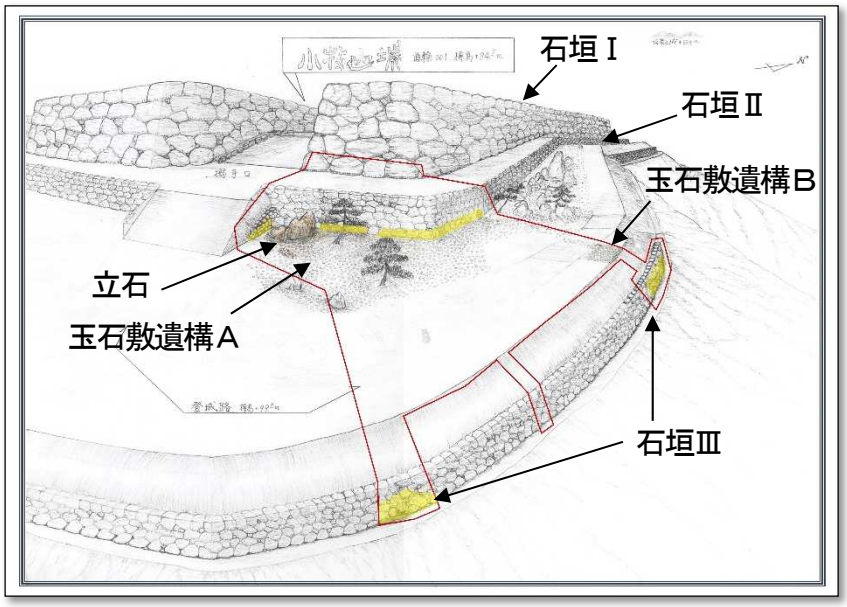

図２　小牧山城山頂周辺推定模式図（南東から）

※主郭東側の調査区の範囲を赤線、今回の調査で確認された石垣などを黄色で表示